

三十周年記念大会におもう

原 宏

九州に在住していたとき、私は中村正夫氏から、近く有賀一喜多野の線でも村居研究者の結集をはかるという話があるので、ぜひ参加するようにという趣旨の誘いを、前もってうけていました。

昭和二十七年十月二十六日の日記には、簡単に「懇親会・山上市議所」としか書いていませんが、日本社会学会大会の懇親会の終りに近くになって、会場の一隅に有志が集まって話し合いをしたと記憶しています。この席で有賀先生にお目にかかっているのですが、とくに親しくお声をかけていただくようなことはありませんでした。

前年の七月下旬に対馬萩原で面識を得てはいましたが、身近な御縁は翌二十八年のいわゆる「仙台大会」のときからでした（拙稿「李朝秋草手に託す」、『未来』一六七号、昭和五十五年八月、未来社）。

先生は昭和二十九年新春の賀状に「……昨年は村居の大会で元氣よくやって頂いたので大変うれしく、又研究通信も九州勢の意氣が大いに上り、これで上々の調子で進展出来るような新春のもり上りだという氣持がしてあります……。」と書いて下さいました。大会直後の『研究通信』七号に、私は「第一回村居大会を顧みて」を投じましたが、ほかにも内藤莞爾・大藪寿一、亡くなった高倉又二といった九州勢の印象記が大会特集号を飾っています。西日本、とくに

九州勢の出席と発言が先生の心頭に強く響いたのでしょう。『研究通信』（昭和四十七年、復刻版）を読み返してみると、どれも少し氣取りすぎた筆趣ですが、私は前述のものを含めて、五十号までに六回投稿しています。

ところで、初期の『研究通信』は、技術的には稚拙な印刷物であっても、素朴で心がこもっています。とくに、事務局（編集者）の文章には、ひざつき合わせて、やり取りする姿勢がにじんでいます。よく、村居草創の初心と言いますが、形に残るものでは、初期のころの『研究通信』、とくに一号から十号、または二十号あたりまでのものこそ、その象徴であると思っております……。

その『研究通信』は、一号の巻頭に有賀先生の「村落社会研究会の発足にあたり」を載せてスタートしました。二号は喜多野清一氏の「『研究通信』への期待」が巻頭を飾り、「第一号を手にして、そこに明るい親和の氣分の満ちていることを非常にうれしく思いました。炉端であぐらをかいて語りあっている氣分を感じます。素人の印刷技術の拙いことは蔽えないがこれもかえって村居炉辺の一興だと云っては、アバタもエクボの類に墮しまししょうか。けれどもみんながこだわりなく意見をのべあうことは、今后この会を発展させてゆく上の大切な要件だと思っております」と書き、さらに年報と年次大会と『研究通信』とを合わせて、『ルーラル・ソシオロジー』創刊号の編集局宣言にいうような「フォーラム」を準備していただくのではないかと呼び掛けています。

事務局手作りの一号・二号は情緒性が豊富で、カットに草花・郵

便ポスト・ガリ版・山羊・猫・おうむ・馬（おもちゃ）・人形・インキ瓶とペン・電気スタンド・街灯・ラジオ・つぼ・だるま・蛸などが描かれています。なかには、煙突らしきもの（？）もあって、いま見ても楽しく、ほほえましいと思います。また、中野卓氏が会計の見通しが著しく好転したので、「研究通信№2より（^マ）は№1の不評判を挽回する印刷が可能と存じます」と書いた会計報告もありますが、三号からは少しきれいになっています。これらを見ても、当初からの会員なら、草創期の実情をほうふつさせる文趣であることがわかると思います。十五号まではガリ版刷りで、十六号からはタイプ印刷となりますが、三号にはほほえましいカットの余韻がまだ残っていました。それも四号以下では、ほとんど姿を消してしまふのです。

村研には会長制がないのですが、研究会結成の最初の提案者であり、会の中心となった有賀先生を「会長のような人」と思い、慕う心情は会員の間におのずと生じていました。『研究通信』四十三号に、内藤莞爾氏は「村研には初会以来、白髪の老人（？）が、世話役の席に座ってござる。この老人が会長さんかどうか、その点も忘れた。十周年で表彰でもしたら、おそらくご機嫌が悪いだろうが、とにかく会の成長や団結に、この人の人望と学殖とが果したところは大きい。仙台は高校時代の古戦場とも聞いている。大会では、大いにその徳をたたえようではないか」と書いています。

会員は肩書きにとらわれず、会則も簡単にという趣旨でスタートしました。現在では共通課題（共同課題）あるいは単に課題といい、

その推進役を課題委員といいますが、これも当初は宿題とか宿題委員と称していました。もっとも、当初の会則にはC1aで宿題とい、附則4では課題とも記していますが、十七号掲載の会則では課題に統一されています。宿題という言葉は、結局なじまなかったのでしょうか。大会のことも、会則では共同討論大会・共同討論会・討論大会・討論会というぐあいに、短い会則なのに各様に表記されています。そういうことに、あまり頓着しないで、規約も大まかに定め、メモ書き程度のものでよいという空気でした。それは、初期によく同志的結合という言葉が使われたことと無関係ではないと思います。

このように、規約や機構などはおおらかでしたが、「村研は厳しい」というのが、若い研究者の間のもっぱらの定評でした。

村研大会は、これまでも何度か、「ふるさと」東北への回帰を繰り返してきました。今また、秋には三十周年にちなんで、記念大会をゆかり多い仙台で開くことになりました。三十年前を振り返って、雑感を記したまでです。